

2022 年度

国府台女子学院 中学部

第二回入試

国 語 (50 分)

【注 意】

1. この問題は、「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
2. **受験番号**は解答用紙の決められたところにはっきりと書いてください。
3. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
4. 印刷が不鮮明ふせんめいでわからない場合や、その他わからないことがあった場合には、だまって手をあげ、先生にたずねてください。
5. **答えは、すべて別紙解答用紙に記入してください。**

注意Ⅱ句読点や記号もそれぞれ一字と数えます。

□ 次の各問題に答えなさい。

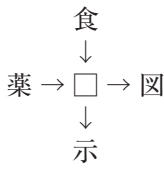
問一 次の①～⑤の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字はよみがなをひらがなで答えなさい。

- ① 人事をサツシンする
- ② クラスのレンタイ感が強まる
- ③ サイシンの注意をはらう
- ④ 目下の課題の解決をめざす
- ⑤ 群青色の美しい海

問二 次の熟語のしりとりが完成するよう、A、Bに入る適切な漢字一字をそれぞれ答えなさい。

都 A ↓ A点 ↓ 点 B ↓ B字

問三 それぞれの矢印の向きにしたがって適切な二字熟語ができるように、□に共通する漢字一字を答えなさい。



問四 次の——線部の語の使い方が適切であれば○、不適切であれば×と答えなさい。

彼女が将来成功することは、火を見るように明らかだ。

問五 次の文中から誤って使われている五字以内の語を探し、正しく改めた表現を答えなさい。

彼女は十一月に受験することを決めたスロースターターだったが、日々たえまざる努力をして、みごとに希望の中学校に合格した。

問六 次のア～エの作品のうち、芥川龍之介あぐたがわりのすけの作品ではないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 蜘蛛くもの糸 イ 小僧ぞうの神様 ウ 杜子春とし エ 鼻

問七 次のア～エのやりとりにおいて、適切ではない敬語が用いられているものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「こんにちは。国府台女子学院中学部です。ご用件は何でしょうか。」
イ 「お世話になります。中学部一年の田中と申します。木村先生はいらっしゃいますか。」
ウ 「木村先生ですね。ただいま席を外していらっしゃいます。席にお戻りになったら、こちらからお電話します。」
エ 「どうぞよろしくお願いいたします。」

問八 最近よく耳にする通信システム「5G」の「G」とは何を表しているのでしょうか。最も適切な説明を次のア～エより一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「Good」の頭文字の「G」であり、システムがいつそう「良好」に改善されたことを表している。

イ 「Genuine」の頭文字の「G」であり、システムが「本物」であることを表している。

ウ 「Galaxy」の頭文字の「G」であり、システムが「銀河系」に通じるほど広がったことを表している。

エ 「Generation」の頭文字の「G」であり、システムの「世代」が進化したものであることを表している。

問九 「ノウハウ」という言葉を用いて、十字以上二十字以内で短文を作りなさい。

【二】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

【A】 かつてのヨーロッパには、みずから城を築いてその主となっていた人びとがいました。ヨーロッパ人はキリスト教信仰ですから、領地内に一族のための教会を設けることもあったようです。

領主が死ぬと、その教会では盛大な追悼ミサがおこなわれたのでしよう。その際、遺体を納めた棺には、ある特徴があったのです。甲冑に身を包んだ勇ましい生前の領主の姿がふたに彫り込まれた、というのがそれです。

死後も自分の姿をそのまま「有形」のものとして残す。いつてみれば、それが西欧人の死生観ということだと思えます。

一方、日本人の仏教を背景とした死生観は、「最後に残るものは何もない」というところにあります。命が尽きて、遺体が茶毘にふされたあとには、

灰しか残りません。それもいつかは土に還っていきます。土葬や風葬でも、からだはときとともに朽ち、やはり、大地に還っていく。残るものは何もないのです。

① 仏教では、もともと「いつさいの存在などない」としています。人も、本来は実体のあるものではなく「縁」によって生じるとするのです。縁とはかわりということです。つまり、人は多くのかかわりのなかで存在し、かわりのなかで移ろい（変化し）、かわりのなかで滅していく。これが仏教の「因縁」という考え方です。

死んでその（因）縁が失われたら、つまり、自分を存在させていた、すべてのかかわりがなくなってしまったら、もう何も残ってはいないのです。有形で残そうにも、何もないのですから、残しようがありません。

日本人が残していけると考えたのは「無形」のものだったのでないでしょうか。亡くなった人から何かを受け継ぐことを「相続」といいます。いまは財産や不動産など、かたちあるものを受け継ぐ、という意味でこの言葉が使われていますが、元来、これは仏教語で「無形のものを受け継いでいく」ということなのです。

仏教の「教え」はその最たるものです。教えを説いてくれた師を、死後にかたちとして受け継ぐことはできません。しかし、かたちがない「教えそのもの」は受け継ぐことができます。お釈迦様の時代から、そのようにして、無形の教えが脈々と受け継がれてきたのです。

【B】 みなさんどこかの寺に行ったことがあると思いますが、寺の大きな屋根を思い出してみてください。その軒先は両端が反りあがっていますが、そのほかの部分はまっすぐな線に見えるでしょう。しかし、あの屋根には細工がほどこされています。実は、「むくり」といって中央部分が上に向かって少

しふくらんでいるのです。

物理的にまっすぐにしてしまうと、見た目には中央部が垂れて見えてしま
うのです。「むくり」をほどこすことで、まっすぐに「見える」ようになる
のです。屋根の機能としてはへこんで見えても問題はないわけですが、目の
錯覚を利用してまで美しさを追求するのが、日本人の繊細な美意識です。

寺だけではなく、こうした建物は日本の随所に見られます。

「禪の庭」にも、そんな美意識を見てとることができます。

たとえば、龍安寺の石庭の築地塀は、実は均一の高さではありません。奥
に行くほど低くなっています。それによって、かぎられた空間に距離感を生
んでいるのです。

いまも京都に残る「京指物」も日本人の美意識から生まれた伝統工芸品と
いっていいでしょう。釘などを一本も使わず、木と木の組み合わせでつくり
あげられた、箆箆や飾り棚などの家具や茶道具が「指物」。その優雅で精密
な細工は、感嘆のため息を禁じえません。

京指物は、茶の湯の文化とともに発展してきました。ここにも、源流に、
禪がたしかに息づいています。

一方、関東にも「江戸指物」があります。こちらは木目を活かし、漆塗
りをほどこしたものが主流。華美を嫌う江戸っ子気質が簡素な美しさを好んだ
ため、そうした作風になったわけですが、そこに見られる美意識は「繊細」
という点で、京指物とまったく共通しています。

和菓子も、日本人の美意識の結晶です。前にもお話ししましたが、季節感
を盛り込んだ和菓子は、その代表格といっているでしょう。素材はもちろん、
かたちや色合いでも季節を表現する。日本の和菓子の持つ独特な美しさと肩
を並べられるスイーツは、世界のどこを探したって見当たりません。

和菓子は、その一つひとつが、丁寧につくり込まれた「小宇宙」といって

もいい。

夏には金魚鉢に見立てた寒天菓子がつくられます。淡い青色の透き通った
寒天のなかに、餡でつくられた金魚が泳ぎ、藻が浮いているというものです
が、これほど涼味を感じさせてくれる和菓子は無いでしょう。

食べるのがもったいなくなる。卓越した細工の技術はもちろん、お客様を
思う心を感じさせるのも、和菓子の特徴。日本人の美意識には、こまやかなお
もてなしの心が織り込まれています。

日本のおもてなしの心のひとつの特徴は「跡を残す」ということではない
か、と思います。

お客さまをお迎えするときなど、玄関の前をきれいに掃き、最後に打ち水
をして清める。部屋は窓を開放して、空気を入れ換え、お香などを焚いて
おく。

いらしたお客さまは、掃き清められ、水が打たれた玄関前に立って、自分
を迎えるために相手が尽くしてくれた思いを汲みとります。隅々にまで気を
配って掃き掃除をしてくれている相手の姿、丁寧に打ち水をしている相手の
姿を、瞬時に思い浮かべます。

「ああ、ここまでこまやかな心配りをしてくださったのだな」

清らかな玄関前の様子から、相手の心配り、それに沿った行為の「跡」を
感じとるのです。

お香も、お客さまが部屋に入るときには、すでにかおりが部屋中に漂って
います。そこはかとなくかおっている。行為の「跡」が残っているのです。
そこから、相手は自分の好きなかおりのお香を選び、あらかじめ焚いてくれ
ていた、ということに感じ入ることになる。

「あれでもか」「これでもか」と過剰なサービスをすることが「おもてなし」
だと勘違いしてはいけません。とくに近頃は「おもてなし」という言葉が少

し安易に扱われ、^{あつか}「足し算」のまちがったおもてなしも、^{どきどき}きが横行している
気配があります。それは独りよがりでしかありません。避^さけたいものです。
けっしてあからさまにしない、これ見よがしでないのが、日本のおもてな
しの心です。

「ここまでいたしました！」

というところは見せないのです。しかし、相手はそれを察する。この無言
のコミュニケーションがおもてなしの真骨頂^{しんこつちよう}といってもいいでしょう。言葉
にするにしても、ごく短いこんな会話が交わされるだけです。

「お心配りありがとうございます」

「行き届きませんで……」

美しいやりとりだと思いませんか。この奥ゆかしさ、素敵^{すてき}だと思いません
か。日本人のおもてなしの心は、どこまでも「静か^{しずか}」です。その静けさのな
かに、相手に対するいっぱいの思いが、心地よくときを過^すこしてもらいたい、
という丁寧な行為が、ぎっしりと、詰^{つま}まっています。

そもそも、おもてなしは、究極の「無私^{むし}」。「自分を見てほしい」「自分のサー
ビスに感謝してほしい」「これ、いいでしょ」と思っているときには、ほん
とうのおもてなしはできていません。私が、おもてなしを禅的だと考えるの
は、「無私^{むし}の実践^{じっせん}」にその本質があるからです。

C ものごとはつきりさせない。あいまいである。——日本人に向けられる
「批判」の典型的なものがこれでしょう。たしかに、「Yes」「No」を明
確に伝える欧米人^{おうえいじん}に比べて、日本人にはなかなか白黒をつけないという面が
あります。

ビジネスの場面などではそれがマイナスにはたらくことも認めましよう。
ですが、私はそのうえで、^{ようじ}「擁護論^{ようごろん}」を展開してみたいと思います。

白黒をつけないということの背景にあるのは、相手に対する気遣い^{きづかい}です。
白とってしまえば相手が傷つくかもしれない、黒と断じたら相手の立場
が危^{あや}くなるかもしれない。その気遣いができるから、あえてあいまいさ
に^{まご}与^よするのです。

そのもとをたざると、お釈迦^{しやくか}様にまで行きつきます。仏教の基本ともいえ
る考え方に「中道」というものがあります。白であれ、黒であれ、極端^{ごくたん}に陥^{おちい}
らない、というのが中道の意味です。

お釈迦様は、当初、厳しい修行を続けておられました。文字どおりの苦
行に身を置いたのです。しかし、悟^{さと}りの境地にはたどりつけません。お釈迦
様は苦行を捨てます。極端な苦行を積むことが悟りへの道だ、とするのは誤
りだと気づかれたのです。

その後、悟りを開かれたお釈迦様は、弟子たちにこんな話をされた、と伝
わっています。

*⁴ 比丘^{びく}たちよ、出家した者はこの二つの極端に近づいてはならない。第一
にさまざまな対象に向かって愛欲快樂を求めること。これは低劣^{れいじやく}で卑^{いや}しく世
俗^{せきやく}的な業^{ごう}であり、尊い道を求める者^{もの}のすることではない。第二にみずからの
肉体的消耗^{じくしょう}を追い求めること。これは苦しく、尊い道を求める真の目的に
かなわない。比丘たちよ、私はそれら両極端を避けた中道をはつきりと悟^{さと}
った。これは人の眼を開き、理解を生じさせ、心の静けさ、優れた智慧^{ちえ}、正し
い悟り、涅槃^{ねはん}のために役立つものである」

また、お釈迦様は中道について、ある弟子にわかりやすい例を引いて説明
もされています。琴^{こと}の弦^{げん}は張りすぎても、ゆるみすぎても、妙^{たえ}なる音は出ない。
ほどよく張ってこそ、よい音が出るのだ。修行もそうあるべきである、とい
うものですが、この中道の考え方が、白黒をつけないという日本人の気質に
繋^{つな}がっているのではないかと私は思っています。

日本人がしばしば使う「塩梅」^④「さじ加減」といった言葉は、中道の心と不可分。どちらも極端に偏らないための「処方箋」^{かたよ}です。極端な味に偏らないために「塩梅」する知恵を使い、極端に多く（大きく）、あるいは、少なく（小さく）ならないために「さじ加減」を用いなさい、ということでしょう。日本人のふつうの暮らしのなかには、自然にお釈迦様の教えが生きている。そんなふうについていいのではないのでしょうか。

□ 毎年、めぐってくる春夏秋冬。四季の移ろいを感じることができるといふそのことは日本人にとって最高の宝物です。

春にはあでやかに咲き乱れ、みずからを惜しむことなく、潔く散る桜に生き方を思ったりします。夏には暑さのなかで、時折、肌に触れる一陣の風の涼しさを感じ、「ありがたいな」と感謝の気持ちがかかります。秋には目を奪う紅葉の綾錦のみごとさに感嘆しながら、ふと、移ろいでいく季節の儂さ^{はかな}に思いが向きます。冬には降り積もる雪の静けさが心にまで ⑤ 染みわたってくる気がします。

このように、四季は日本人の心とともにあると聞いていいでしょう。日本人は四季を心で受けとめ、その移ろいに心を寄り添わせてきました。

「散りぬべき 時知りてこそ 世の中の 花も花なれ 人も人なれ」

これは細川ガラシャの辞世の句ですが、散りどきを心得た桜花の在り様が、戦国の世に翻弄^{ほんろう}されながらも、みずからを貫いて生きた、ガラシャの「人生訓」でもあったことをうかがわせます。

季節の移ろいに身をまかせるように散っていく桜。自分もまた時代の移ろいのなかであるがままに生き、果てよう。そんなガラシャの思いが伝わってきますませんか。

*

⑥ 季節の美しさを楽しむことに、日本人は情熱と知恵を注いでもいます。京都の北に天台宗の寺である実相院があります。紅葉の季節になると、境内のもみじが燃えるような赤に転じる。

もちろん、それだけでも十分にみごとなのですが、同寺ではさらにひと工夫凝らしているのです。

ピカピカに磨きあげた床にもみじの赤が映し出される。「床もみじ」です。もみじが植え込まれている場所、光の方向、床の位置……そうしたものでべてが整ってはじめて、目にすることができる景色です。寺が建てられた時代の先人が、意図したか、しなかつたか、いまはたしかめるすべもありませんが、季節の美しさと一体でありたい、と願った日本人の心がヒシヒシと伝わってきます。

日本各地にある紅葉の名所では、川や池、湖沼の水面に映り込む姿が ⑦ となつているところが少なくありません。流れゆく川やさざ波立つ池、湖沼の水面で刻々と姿を変えていく紅葉が、よりときの移ろいを感じさせるからかもしれません。

ときとともに季節は移ろい、人の心もまた移ろいでゆく。日本人にはそんな無常観が備わっています。

□ 日本には「月を愛でる」という文化があります。おそらく、これは日本独特のものでしょう。「禅の庭」も、例外なくといていいほど、月を意識しつづられています。

たとえば、龍安寺の石庭も、月明かりで照らされたときがいちばん美しい。みなさんは、降り積もった雪が月に照らされた光景を見たことがありますか。青白い光のなかに浮かびあがる雪景色の美しさは、まさしく筆舌に尽くしがたい「美」です。張り詰めたような、心が研ぎ澄まされるような、凜と

した空間はいつまで見ている見飽きるといふことがありません。

石庭の白砂は、雪の清らかさをどこかで意識しているのではないでしょう。月に照らされた砂紋のさまざまな「影」と、砂の「白」とがつくり出す美の妙は、雪景色の起伏がつくり出すそれと共通しているような気がします。寺をはじめ、古い日本の建物には「月見台」が設けられているものが少なくありません。もちろん、月をもっと美しく見るための場所です。

有名なのは京都銀閣寺の名前で有名な慈照寺の庭につくられている「向月台」。白砂を富士山のようなかたちで盛り固めた台の手前には、海を思わせる「銀砂灘」と呼ばれる敷き詰められた白砂が広がっています。

その美しさに言及したのが岡本太郎さんでした。岡本さんは次のような表現で讃えています。

「正直にいつて、はじめて見たとき、私自身がギクツとしました。(中略)この盛り砂の形もふしぎです。いったいこんな形が、かつての日本美学の中にあつたでしょうか。幾何学的でありながら、なんともいえぬ非合理的な表情をたたえて、いわゆるモダンアートにしか見られない、ふしぎに美しい形態です。(中略)私の発見したよるこびの、もつとも大きなものの一つだった」

日本が世界に誇る稀代の芸術家が、あの大きく見開かれた眼光に、感動の思いをたたえたことは想像にかたくありません。

この向月台は、慈照寺の背景となつている月待山に上る月を見るためにつくられたとされています。静かに月が上るのを待ち、天空に輝く月が照らし出す庭の美しさを愛でた。こんな「風流の粋」は日本人の心だけが受けとれるものだ、といったら、少々、いいすぎになるでしょうか。

*

平安時代の貴族は、月を直接眺めるのではなく、池に船を浮かべ、水面に映る月を愛でたといわれます。宴が催された折などは、杯に映る月も楽しんで

でいたようです。その名残なのか、手水鉢を月の映し鏡にしている庭がいまも見られます。

若い世代には手水鉢といつてもわからないかもしれませんが、これは軒下に置いてある、手をすすぐための鉢です。ですから、通常、置く位置は縁から手が届く範囲でなければ意味がないわけです。

しかし、それをわざわざ軒下から遠ざける。上つた月をそこに映すためです。手水鉢の小さな水面に月が入っている。時間はわずかなものでしょう。そのわずかな時間、月を愛でるために、あえて実用性は放り捨てるのです。水面に宿つた幻想的な月、ささげえとした月、清らかな月を眺めるとき、心は澄みわたるのでしょうか。あるいは、心が癒やりに包まれるのでしょうか。いずれにせよ、日本人が「そのとき」を大切にすることはたしかです。

私は、そこに日本人の美しさを求める心の豊かさ、美意識の高さを思わずにはいられません。

月を愛でる日本の文化をさらに加速させたのが「禪」でしょう。

禪では、月に悟りを見ます。禪文化が広まるにつれ、「月＝悟り＝真理」という捉え方が日本人のなかに根づき、月への思いを深めていったのだ、と思います。

「水急にして月流さず」という禪語があります。

という意味。つまり、真理というものはどんな過酷な環境にあつても、混乱、動乱の時代にあつても、変わることがなく、また、揺るがないものである、ということはこの禪語はいつています。

こんな禪語もあります。

「水を掬すれば月手に在り」。両手で水を掬い取つたら、その手のなかに月は光を映しているということ。月はたったひとつですが、どこにいても、誰の手にも映り込んでくれるのです。

真理、仏性は誰もが心のなかに持っています。しかし、それに気づかないことも往々にしてあるのです。両手に掬った水に映る月を見て、ハタとそれに気づく。いつか、誰にも、そんなときがきたらいい。禅語にはそんな思いも込められているようです。

心のなかの仏性とは、まっさらな一点の汚れもない心とっていいでしょう。状況のなかで、人間関係の狭間で、さまざまに揺れ動く心とはちがった心が、人には備わっているのです。

日本を代表する哲学者で、いわゆる京都学派と呼ばれる哲学の一大潮流をつくった西田幾多郎さんが詠んだこんな歌があります。

「わが心 深き底あり 喜びも 憂いの波も とどかじと思う」

心の深いところの底に何かがある。日常の喜怒哀楽から離れた、静謐と呼んだらよいような、静かでたしかな心がある。西田さんがそう詠った心こそ、仏性というものなのだと思います。

奈良、平安の昔から日本人が繋いできた月を愛でる文化を、ぜひ、引き継いでいってください。そして、まっさらな心に気づいてください。

(枅野俊明『日本人はなぜ美しいのか』幻冬舎新書)

*1 西欧…西洋。ここでは「欧米」と同様の意味である。

*2 茶毘…火葬。

*3 与する…同意する。関係する。

*4 比丘…修行僧。

*5 幾何学…図形や空間の性質を研究する数学の部門。ただし、ここ

では、多角形や円形などを複雑に組み合わせたような独特の形を表す。

*6 静謐…静かでおだやかな様子。

問一 — 線部①「仏教では、もともと『いっさいの存在などない』としています」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適切な説明を次のア～エより一つ選び、記号で答えなさい。

ア 仏教の教えでは、全てのものは「縁」によって生じ、いつまでも形を留める絶対的な実体を持つものなどないと考えているから。

イ 仏教の教えでは「無形のものを受け継いでいく」ことを大切にし、その教えもそのまま後世に残すべきではないと考えているから。

ウ 仏教の教えでは、「縁」によって命が尽きれば、遺体でさえも茶毘にふして、そのあとに何も残さないことが大切だと考えているから。

エ 仏教の教えでは、人も「因縁」を通じて生まれ、自らその縁を絶てば、物事との全ての関わりは消滅してしまうと考えているから。

問二 [B]の文中の「むくり」や「指物」は何を示すための例ですか。本文中から十字で書きぬいて答えなさい。

問三 — 線部②「小宇宙」とありますが、和菓子をごのようにとらえているのはなぜですか。最も適切な説明を次のア～エより一つ選び、記号で答えなさい。

ア 和菓子は、職人の卓越した技術で季節を感じさせるもので、日本人の美意識が銀河の星々のように輝いているから。

イ 四季のある日本において、季節感をふんだんに盛り込んだ和菓子はまさにさまざまな天体をイメージさせるから。

ウ 職人の卓越した技術により、素材やかたち、色合いなどでその季節を感じさせる、統一された美しい世界観を構築しているから。

エ 寒天や餡^{あん}などのありとあらゆる素材と繊細^{せん}な技術で、日本人の好みを知りつくした味わいに仕上がっているから。

問四 — 線部③「こまやかなおもてなしの心」に関して、日本人が大切にしていることは何ですか。次の説明の□にあてはまる最も適切な三字をBの中から書きぬいて答えなさい。

おもてなしをする側は相手を思っ^てて尽くした行為の「跡」のみを残し、それを受ける側はその思いを感じ取り行為の「跡」を□^{こと}。

問五 — 線部④「塩梅」の読み方を次のア～エより一つ選び、記号で答えなさい。

ア えんばい イ あんばい ウ あんまい エ えんまい

問六 文中の□⑤にあてはまる言葉として最も適切なものを次のア～エより一つ選び、記号で答えなさい。

ア しらじらと イ しなしなと
ウ しんしんと エ しとしとと

問七 — 線部⑥「季節の美しさを楽しむこと」とありますが、このあとに述べられる「紅葉」に関する説明として適切なものを次のア～カより二つ選び、記号で答えなさい。

ア 実相院の「床^{ゆか}もみじ」は、あらゆる条件が偶然^{くうぜん}重なったときに思いがけず発見され、後世の人々に人気を博すようになったものである。

イ 生命力にあふれ、燃^もえるように赤く色づく紅葉の永遠の美しさに、人々が無常を感じながら観賞できる場が紅葉の名所とされている。

ウ 実相院の「床もみじ」は、境内のもみじを観賞するだけではなく、季節の美しさと一体でありたいという人々の願いが体现されたものである。

エ 一時も留まることのないものに美を感じる日本人の感性にかなう、刻々と姿を変える紅葉の様子を観賞できる場の多くが紅葉の名所とされている。

オ 実相院の「床もみじ」は、先人たちがその理想を込^こめて、燃えるように魅力的なもみじの観賞の幅を広げようと床にもみじが映るよう工夫したものである。

カ 水面に映ることにより鮮^{あざ}やかさを生み出すもみじが、過ぎゆく秋の寂^{さび}しさを演出し、それを観賞できる場が紅葉の名所とされている。

問八 文中の□⑦には「見どころ」という意味を表す語が入ります。最も適切な語を次のア～エより一つ選び、記号で答えなさい。

ア 顔 イ 目玉 ウ 心臓 エ 肝^{きも}

問九 — 線部⑧「私自身がギクツとしました」とありますが、この時の岡本氏の気持ちを表したものととして最も適切なものを次のア～エより一つ選び、記号で答えなさい。

ア 盛り^もり砂の形態の、こちらが畏^{おそ}れを抱^{かか}りてしまうほど気高い美しさに驚^{おど}いてしまう。

イ 古い建築物に、こんなにも現代的で美しい形態の盛り砂があるのは

極めて不自然だ。

ウ 古来の日本に、これほど美しくも斬新な盛り砂の形があったことに
気付いて感動した。

エ 幾何学的であるのに美しいという、通常ではありえない美が体現さ
れていて衝撃的だ。

問十 — 線部⑨「そこに日本人の美しさを求める心の豊かさ、美意識の高
さを思わずにはいられません」とありますが、筆者がそのように感じる
のはなぜですか。最も適切な説明を次のア〜エより一つ選び、記号で答
えなさい。

ア 日本人は、宴で杯に映る月を楽しむ一方で、それを手水鉢にも応用
させてみようという向上心を持っていたから。

イ 日本人は、手水鉢の水面に映った月を幻想的だと感じ、それを眺め
る時に癒しを感じる誇り高さを持っていたから。

ウ 日本人は、杯や手水鉢の水面に映った幻想的で清らかな月に、心ま
でも澄み渡らせる清純さを持っていたから。

エ 日本人は、手水鉢の本来の実用性よりも、その水面に月が映る最も
幻想的な時間を大切にすることを持っていたから。

問十一 文中の⑩にあてはまる文として最も適切なものを次のア〜エよ
り一つ選び、記号で答えなさい。

ア 川の流れが速く激しいと、川面に映っている月影は、その流れに応
じてどうしても流されてしまう

イ 川の流れがどれほど急であっても、月は川面に映り、しかもその月

はいつでも美しい満月なのである

ウ 川の流れがどんなに速くても、激しくても、月はその川面に映り、
けっして流されることはない

エ 川面に映る月影がけっして流されることのないように、川の流れは
常に一定の速さで流れ続ける

問十二 — 線部⑩「まっさらな一点の汚れもない心」を言い換えた部分を
本文中から八字で探し、書きぬいて答えなさい。

問十三 本文の内容について様々な意見を挙げました。次のア〜オのうち本
文の内容に合っているものには○、そうでないものには×と答えなさい。

ア 「『相続』という言葉はそもそも仏教語で、無形のものを受け継ぐと
いう意味だったんだね。でも今は財産や不動産など有形のものを受け
継ぐという意味で使われているということが書かれているし、**A**の部
分ではわれわれ日本人が本来大切にしていた無形のものを受け継ぐと
いう仏教の教えは失われつつあるということを主張したいようだね。」

イ 「日本には伝統的なものが様々あるけれど、**B**では特に建築や和菓
子に焦点をあてているね。建築の例では、一見しただけではわからな
いけれど、美しく見せるための繊細な工夫が施してあったり、和菓子
の例ではわれわれに四季折々の美しさを感じさせる技術やお客様を思
う心があったりすることがわかったね。」

ウ 「**C**の文中にもあるように、日本人は白黒はつきりさせることが苦
手だよ。すごく共感するのだけれど、筆者も述べているとおり社会
に出てビジネスの場面ではそれはマイナスにはたらくことがあるよ

ね。筆者はお釈迦様の中道の例を挙げて白黒つけない日本人を肯定しているようだけれど、自然にお釈迦様の教えが生きている今の日本人の気質を保ちつつ、現代社会の実態に合わせて考え方を変えていかねばならないことを訴えているんだね。」

エ 「日本には四季の移ろいがあるということが大きな特徴だよ。この移ろいに心を寄せてきたからこそ日本人の美意識が育まれたといっても過言ではないね。Dでは、特にもみじの例を挙げて、日本人が季節の美しさを捉え、その美しさと一体でありたいと願った心について述べていたね。日本人はその季節と一体であり続けたのには、季節は移ろう無常なものであるという皮肉を無念に感じている様子がよくわかったよ。」

オ 「私たち日本人にとって『月』が美の対象であるのは普通だと思っ
ていたけれど、Eの冒頭で、それは禅文化の影響であることがわかつたよ。ただ、これまで月を真理や悟りの対象として考えたことはなかったからEではこの部分について考えさせられたね。現代社会では人間関係が複雑になって、きつと心の揺れ動きも大きくなったよね。だからこそ、日常の喜怒哀楽から離れてまっさらな心に気づくのが大切だということを、平安時代より受け継がれてきた月を愛でる文化から気づかされたよ。」

問十四 A～Eの文章に共通するテーマとしてもっともふさわしいものを

次のア～エより一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本人が求めてきた価値観のすばらしさ
- イ 日本人が守ってきた伝統文化のすばらしさ

- ウ 日本人が作り上げてきた芸術のすばらしさ
- エ 日本人が育ててきた道徳心のすばらしさ

一

問一

④	①
⑤	②
	③

問二

A
B

問三

問四

問五

問六

問七
問八

問九

二

問一

--

問二

問三

問四

問五

問六
問七

問八

問九

問十

問十一

問十二

問十三

ア
イ
ウ
エ
オ

問十四

--

受験番号

--